パーソナリティ検査の尺度化方法に関する一考察

イプサティブ形式とノーマティブ形式の比較

○堀博美　水島奈都代
（日本エス・エイチ・エル株式会社）

Key words: イプサティブ、ノーマティブ、作為

背　景　と　目　的

多次元のパーソナリティを測定する質問紙検査の形式は大別すると 2 つある。いくつかの質問項目を組にしてその中から「最も自分にあてはまる（もしくはあてはまらない）」項目を選ばせる形式と、ひとつひとつの質問項目に対して「はい・いいえ」もしくは 5 段階などの評定尺度上で答えさせる形式である。前者はイプサティブ（以下Ｉ）形式、後者はノーマティブ（以下 N）形式と呼ばれる。

I 形式による尺度化にはいくつかの疑問が出されている（Johnson et al.,1988）。測定される尺度全ての合計点が個人において一定となるため平均や標準偏差などの基本統計が独立ではなく、因子分析など通常の統計技法を当てはめることができない、というものである。

これに対し、Saville＆Willson（1991）は N 形式には社会的望ましさや中央化傾向などの回答バイアスが含まれることを指摘し、コンピュータによるシミュレーションデータと実データを用いて、両形式による因子分析結果に高い一致が見られることを示した。

本研究の目的は次の 2 点である。

① 両形式による測定結果の比較。

② 作為に対する強度の比較。

方　法

＜使用テスト＞OPQ（Occupational Personality Questionnaires：日本エス・エイチ・エル株式会社）。30 尺度を測定する検査で I 形式と N 形式がある。I 形式は異なる尺度に属する項目を 4 つずつ組にし「自分のパーソナリティに最も近い項目」と「最も遠い項目」を選ばせるもの、N 形式は全項目に対して 5 段階で回答させるものである。

＜被験者＞筆者らが勤務する機関のテスト開発協力者 581 名。

＜手順＞

(1)　全員に（作為の指示をせず）I 形式を実施。

(2)　(1) の結果得点がほぼ同質となるよう統制群と作為実験群の 2 グループに分割。

(3)　統制群には（作為の指示をせず）N 形式を実施。

(4)　作為実験群には作為の指示をした上で、I 形式と N 形式を実施。

＜作為の指示＞作為させるポイントをストレス耐性に絞った。具体的には「感情に支配されず、プレッシャーを上手に扱うことができる、プレッシャーがかかっても平静さを保てる人であるかのように回答をしてください」と指示、関連する尺度定義を例として挙げた。

結　果

① 統制群のデータを用い、通常の受検状態における同一人物の両形式による測定結果を比較した（n＝246）。同一尺度の両得点の相関係数を算出したところ、30 個の平均は 0.57、標準偏差は 0.15、分布は図 1 のとおりであった。

② 実験の結果、ＩＣ・ＮＣ・ＩＤ・ND（注：それぞれアルファベット 1 文字目が検査形式、2 文字目が統制群（Ｃ）か作為実験群（Ｄ）かを示す）の 4 グループのデータが得られた。作為指示に関連する 5 尺度について、グループの平均の間の差を分散分析で検定し、有意差の見られた尺度について多重比較を行った。分析結果と各グループの平均、標準偏差を表 1 に示す。

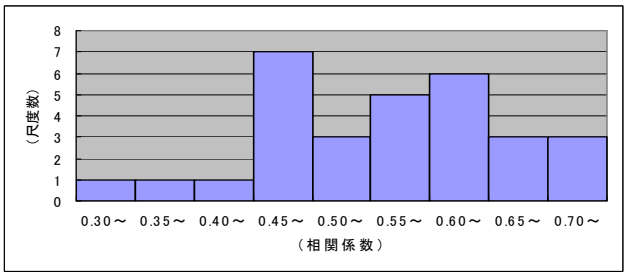

図 1：同一尺度のI得点とN得点の相関係数分布

表 1：検査形式×受検状況　基本統計

グループ	IC		NC		ID		ND		F	
人数	290		246		257		247		検定	多重比較
尺度名	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
余裕	5.30	2.08	5.80	2.21	8.49	2.32	9.35	1.60	**	IC・NC<ID<ND
心配性	7.26	1.76	8.60	1.77	3.44	2.51	3.29	2.65	**	ND・ID<IC<NC
タフ	5.17	2.20	5.96	1.99	8.57	2.43	9.30	1.52	**	IC<NC<ID<ND
抑制	5.80	2.12	7.88	1.68	8.02	2.44	8.89	1.45	**	IC<NC・ID<ND
楽観的	5.23	2.21	4.35	1.95	7.88	2.27	7.62	2.05	**	NC<IC<ND・ID

(** p<.01)

考　察

同一人物が両形式を受検した場合、同一尺度の相関係数は平均で 0.57 であった。パーソナリティ尺度の信頼性を念頭におくとこの値はかなり大きいと考えられる。両形式による測定結果に類似性が確認された。

作為に対しては、平均点を見る限りどちらの形式でも得点は変化した。ただ、分散分析の結果を細かく見ると、「余裕」「心配性」「楽観的」の 3 尺度について、N 形式のほうが I 形式よりも、作為の有無によって得点がより大きく変化していることがわかる。今回の実験では通常受検と作為受検を同一人物が行うことができなかったため間接的な結論ではあるが、作為に対して I は N より強いと考えられる。

検査で最も重要なのは妥当性である。先行研究を検討すると、どちらの形式が妥当性に優れているかについては研究によって結果が食い違う。本研究から、通常受検の場合、両形式の結果はかなり類似していること、作為に対して I のほうが強いことが推論された。採用試験など意識的無意識的に作為が混入する可能性の高い場面で使用された場合の結果の妥当性について、両形式を比較することが次の課題である。

引用文献

Johnson,C.E.,Wood,R. & Blinkhorn, S.F.(1988). Spuriouser and spuriouser: The use of ipsative personality tests. *Journal of Occupational Psychology*, 61, 153-162

Saville,P. & Willson, E.(1991). The reliability and validity of normative and ipsative approaches in the measurement of personality. *Journal of Occupational Psychology*, 64, 219-238

（Hiromi Hori, Natsuyo Mizushima）